



October Newsletter

College for International Co-operation and Development



Dear friends and future volunteers

今回のニュースレターは、先月にお伝えすることができなかった、CICD での多くの出来事についてお送りいたします。CICD 10 周年記念パーティ、ビルディング・ウィークエンド、ガイアプログラムの経験などに、CICD の学生生活をお楽しみいただくことができます。

また、アフリカからは、今年9月にモザンビークのニャマタンダにてチャイルド・エイドの活動を終えたばかりのジョンによる、彼の最終レポートをお送りいたします。それと平行して、現在モザンビークのドリビザ村で活動中のイステイヴァンから、彼の旅行についての短い報告があります。

内容盛りだくさんの今回のニュースレターを、どうぞお楽しみ下さい。

CICD 10 周年記念パーティー

10月4日(土)に、College for International Co-operation and Development (CICD) の創立10周年記念パーティーが行われました。

1998年10月1日、CICDは開発途上国とDRHスクールにて長らく活動を続けていた、カレン・バルソ(現・学校長)とロルフ・ジャックブソン(現・中古衣類リサイクル責任者)によって創立されました。創立以来、CICDでは多くのスタッフや人々の協力のもとに、現在までに427名のDevelopment Instructorがアフリカ/インドへ派遣されました。今回のパーティーでは、CICDはもちろん、Development Instructor達の大きな活動とその成長ぶりが、地元の地域住民やOB、関係者各位など、実に多くの人々によって祝われました。

この日は、実にたくさんの催し物が行われました。例えば、2007年9月チームのジョンによる彼のDI (Development Instructor) 生活や、モザンビークでの活動についてのプレゼンテーションでは、多くの一般訪問客に対し、CICDの活動やアフリカの状況についてより鮮明に伝えることができました。

午後になると、日本人やクルド人による「インターナショナル・パフォーマンス」が披露されました。特に日本人の人々は、彼らの伝統的な踊りの1つともいえる「ソーラン節」を大勢の前で披露し、観客を楽しませました。



また、学校長や指導教員、関係者各位による演説も行われ、ジェームズ（1998年CICD創立時の最初の学生）が書いた歌が歌われました。それから、CICDは思いがけない素晴らしいプレゼントを受け取りました。それは、ジンバブエの優秀なアーティスト団体「Friends Forever」によって制作された5つの彫刻です。これらの彫刻は、現在、CICDの校舎内外に展示されています。（ページ3参照）

また、天気はあまりよくありませんでしたが、CICDと訪問客クルド人によるサッカーの試合が行われました。私たちCICDのチームはアルゼンチン、ブラジル、日本、ポーランド、ハンガリーなど、まさにインターナショナル・チームで構成され、プロであるクルド人チームと試合を行いました。生憎の天気にも関わらず私たちは大いに楽しみ、最後の私たちCICDチームは、1-0でクルド人チームに勝利しました。



インターナショナル・チーム



クルド・チーム

このような様々な催し物で疲れた私たちを元気づけるかのように、その日の夕食はとても豪華でおいしいものでした。夕食後には歌が歌われながら全員にプレゼントが渡され、ケーキを楽しみました。

この1日は、私たちに実に多くのことを教えてくれました。国籍や育ってきたバックグラウンド、年齢が異なる仲間と協力してこのような活動を行い、私たちはアフリカ/インドでも一緒に世界を良くしていく試みを行います。

私をはじめ、CICDにいる多くの仲間たちは、私たちの夢を成し遂げることのできる「CICD」という場所と、彼らが私たちに与えてくれる「チャンス」に感謝します。これは偽善的に聞こえるかもしれませんが、しかし、何かを果たす唯一の方法は、ユートピアを信じて夢を見ることです。そして、前進することなのです。

2008年9月チーム パブロ・セラーノ（ロシア出身）



「Friends Forever」からのプレゼント

「Friends Forever」とは、ジンバブエの熟練の彫刻家が集まった一団です。彼らの芸術作品は高く評価されており、世界中で展示品を見つけることができます。

関連 URL 【<http://www.friendsforeverzimbabwe.com/about.asp>】

今回、CICDがFriends Foreverから贈られた彫刻は、以下のようなものです。

1. 妊娠3ヶ月間の女性 By Colleen Madamombe
2. 伝統的治療者 By Edward Chiwawa
3. 天国に望みがある By Lazarus Takawira
4. 座った老婦人 By Fanizani Akuda
5. 家族 By Mikias Munyaradzi



1. 妊娠3ヶ月間の女性



2. 伝統的治療者



3. 天国に望みがある



4. 座った老婦人



5. 家族



その他の彫刻：デンマークでの演劇会の賞

ビルディング・ウィークエンド 9月12日～14日

CICDをはじめ、世界各地にある DRH スクールの最も大きな伝統の1つとして、ビルディング・ウィークエンドがあります。月に1度の週末、学生とスタッフが一同になって、私たちが生活する学校建物の修復活動が行われます。この活動は、修復作業に関する学校経費を抑えるということも目的にあります。それだけではありません。私たちはこのような活動を通して、アフリカ/インドで活動するときに必要となる多くの役立つ技術を学ぶことができます。例えば、壁を学校に建設することは、あなたの建設についての知識と経験を向上させます。そして、この知識と経験は、例えばあなたがアフリカ/インドで幼稚園や図書館を建設する必要があるときに、大いに役立てることができます。

9月のビルディング・ウィークエンドでは、とても大掛かりな活動が行われました。いつもはCICDの学生とスタッフの50～60人で行われますが、このときは違いました。なぜなら、デンマークのDRHスクールのスタッフや、バーミンガムとニューキャッスルで活動するガイアプログラムの人々もこの活動に参加したからです。それは、総勢90人にも及ぶものでした。このときだけ、私たちは金曜日の朝から日曜日の午後まで、いつもより多くの時間をかけて多くの作業を行いました。

セメント作り



まず、私たちは4～5人のグループに分けられ、学校の周囲で異なる仕事を行いました。活動の例は、以下の通りです。

1. スクール・ビルディングの玄関の床をはりかえる。
2. 教室に新しいランプを配置する。
3. チャイニーズ・エンバシーの天井のペンキを塗り直し、新しいカーテンを配置する。
4. 学生の宿舎のリビング・ルームの絨毯を全て床にはりかえ、新しい家具（本棚）を配置する。
5. モザンビーク・ビルディング（学生の宿舎）に、1つの新しいバスルームと台所を設置する。
6. 壁に埋め込まれた古い暖房設備を取り除いて修復し、壁をきれいに見せる。

ランプ・チーム



ランプの取りかえ



私の仕事は、まず、チームメイトと一緒に教室のランプを設置することでした。私は電気技術者なので、どのようにするのかを知っていました。なので、この仕事はやり遂げるのに何ら問題はありませんでした。

しかし、その後、私たちは絨毯から床にはりかえる仕事をしなければならなかったのですが、私たちはこのような仕事を行ったことがありませんでした。そのため、この仕事は私にとっては新しい経験でした。床へのはりかえはとても簡単で、楽しいものです。しかし、私たちはミスをしました。この仕事をするとき、私たちは床の木の最後の部分と壁の間に10mmのスペースを残さなければなりません。しかし、私たちはどうやら15mmくらいのスペースを残していたようで、結果的に私たちは床の半分を取り出してもう1度やり直さなければならませんでした。それは、とても私たちをがっかりさせる出来事でした。しかし、今となっては、私たちはどのようにこの仕事をするのかを知っています。



私たちの他のチームの中には、キッチン・チームがありました。彼らは、90人もの人々のために、おいしくて栄養価の高い食事やケーキを準備しなければなりません。一見、簡単そうに見える仕事ですが、実はそうではありません。彼らのおかげで、私たちは活動を続けるエネルギーとモチベーションを与えられることができました。



このビルディング・ウィークエンドは、とても多くの仕事が行われた週末でもありました。私たちは、とてもいい仕事をしたと思います。そして、私たちはこの仕事を楽しみました。私たちは自分たちがどのような成果を残したのかを見てとることができ、仕事を行う上で大事になる協力や意見の聞き入れについて学ぶことができたからです。

最後に、わざわざこの日のために来てくれたデンマークのDRHスクールのスタッフのみなさん、そしてその他の関係者各位に感謝します。

それにしても、本当に素晴らしい仕事でした。

ミスをし、そこから学び、「私自身の手」で、物事をチェンジする。—それが、私たちの生活を私たち自身で決定するという事ではないでしょうか。

そうは思いませんか？

2008年9月チーム パブロ・セラノ (ロシア出身)

ガイアプログラムの経験と現在の責任

午前8時になると、ニューキャッスルの宿舎では、リーズ（ニューキャッスル管理責任者）の「ミーティング!!!」という叫び声が響き渡ります。

さて、私たちは常に貧困との戦いや環境問題、人権に対する戦いについて、その情報を読んだり、耳にしたり、話したりしています。そして、私たちは個人または集団の中で、これらの闘いの責任を負うことがあります。

この「責任」という言葉は、英語で「Responsibility」といい、その言葉の語源は「ラテン語」の動詞「(re)spondere」に由来しています。意味は、「厳粛に約束する、誓う、義務を負う。」ということです。



これらの言葉にある、共通するポイントは「アクション」です。具体的に言えば、私たちが責任を果たすとき、同時に私たちは行動を開発していることが想定されます。

そのとき問題なことは、その行動に「積極的に取り組む姿勢」がないときです。これがなければ、果たして私たちは目標に向かって本当の責任が伴っているのかということです。私がただ単に、とても「いい試みだ」といっているような事柄の結果では、何の正当化もできません。

毎朝、ニューキャッスルの宿舎内で響き渡る「ミーティング！」という叫びは、このことを警戒することの重要性を意味しているように私は考えています。

常に見直すこと。量と質を伴った毎日の行動と目標を、寒さや厚さ、雨や太陽の下で遵守すること。付け加えると、グループとして、または1人の人間として、日々の目標を達成するために、プラスとプラスを合わせること。

目標の達成に向けての話し合いとは、最終的にはどのような動きが「積極的に取り組む姿勢」であるのか、それについて話し合うことではないのでしょうか。

今日は、皆さんが提供してくれた服や靴を収集しました。

明日は学習日で、多くの人々が集まり、グループが形成されて多くの活動が成されます。

気を緩めないことを確認すること。毎日、目標のためにミーティングを持つこと。非日常的な戦術を練ること。その戦略が、間違いなく目標の達成に導きます。

これが本当の意味での「責任」のためのエクササイズです。日々の「ミーティング！」という叫びが、私たちの心の中で鳴り続けます。

街に行き、「これが責任を伴うやり方です。」と他のグループに教えに行きましょう。

Thank you, Gaia Course. September 2008.
2008年9月チーム ハニョ（コロンビア出身）

DI とボランティアの経験とは？



こんにちは、私はカメルーン出身のジョンといいます。私は現在 36 歳です。私の家族は生活するために必要となるものをもっており、私を育てた母は、私を含めた 7 人の子どもたちに基礎教育を与えることができました。とはいえ、私たち家族は、自分たちより貧しい境遇にいる人々についてよく考えることができました。

私は、自分の初等教育～高等学校教育までをカメルーンで受けました。その理由としては、家族が私に対して、もっと将来性を見込める境遇を探すことを望んでいたからです。

1994 年に私はイタリアへ移り、ペルージャ大学の政治学部に入りました。私は大学と大学院（修士）において、国際条約を専攻としました。

私は修士号取得後、外交分野を学ぶことを決意しました。しかし、私は学位があったにもかかわらず、カメルーンの外交を学ぶ学校に入学することができませんでした。なぜならば、私には繋がりもなく、賄賂を支払うためのお金もなく、エリートの一員でなかったからです。私は自分の夢を諦めました。



私が CICD プログラムに参加した理由

2007 年 8 月に私が CICD プログラムに参加することを決定したとき、私は自分自身に「ジョン、あなたをそこへと行かせるその場所は、あなたも導きそうな場所ですか」と言いました。私は正直に言いますと、私が CICD に到着したとき、あまり良い印象を得なかったのです。それはおそらく、私が最初に話した人々があまり英語を得意としなかった人々だったために、私自身があまり感銘を受けなかつただけのことだと思います。

私は当初、「CICD はとても高い基準の人々が集まる場所ではない」と思っていました。CICD が「夢をもつ人とそれを追いつける人」のための場所であることを、私は知らなかったのです。私の CICD での新しい経験は、私が子ども頃に思い描いた夢「必死になって助けを必要としている人々を助ける」ということを本当に実現しました—私は「夢をもつ人とそれを追いつける人」になりました。



私は CICD の事前研修から何を学んだか？

私がまず最初に学んだことは、「チーム精神」だと思います。私はいつも、先生が「コモン・ゴール」か「チーム・ゴール」について話していることを聞きました。「コモン・ゴール」とは、仮にあなたがあなたのスタディ・ポイントと Partnership 活動のゴールを達成すれば、それで終わりということです。逆に「チーム・ゴール」とは、仮にあなたがあなたのスタディ・ポイントと Partnership 活動のゴールを達成しても、同じチームメイトがそれを達成できていなければ、終わりにはならないということです。

私が CICD に滞在期間中に学んだチーム精神は、私をとっても多く支えてくれたものだったので、私はスタディ・ポイントと Partnership 活動のゴールが達成できないチームメイトを助けました。個人の強い意地に縛られてはいけないと思ったからです。これは、チームが勝つのか負けるのか—ある意味、サッカーの試合が個人のためのゲームではないのと同じように、私たちチームメイトもまたそうだということができると思います。

次に私が学んだことは、国籍や年齢、バックグラウンドが異なる人々との共同生活です。私はいつも、チームメイトや多くの人々と一緒に活動しなければなりません。例えそれが、理解することが難しい人であってもです。これはある意味、本当の挑戦でした。それは、外交手腕や高い学位を必要とするものではなく、忍耐や理解、妥協というものが重要になってくるものでした。

そのうえ、私はある意味、「よろず屋」とは何かを理解しました。料理すること、掃除すること、買出しすること、議論すること、何かを企画・運営すること、予算を組むこと、運転すること。あなたがこれらの課題をうまくこなせばこなすほど、あなたの名前が覚えて多くの人から頼りにされます。丁度、私が CICD にいる間そうであったように。

その他にも、私の CICD での事前研修期間におとずれた様々なことが挙げられます。今では、その1つ1つを思い出すことはできません。それでも私がいえることは、物事は何でも起こりうるもので、それをこなすことも可能であることを知ったということです。

これらのことから、私は CICD での事前研修期間中に、自分のリーダー・シップ能力と精神を強く保つことを高めることができました。CICD の学生やスタッフ、実に多くの人々が異なるバックグラウンドを備えるがゆえに、あなたがもし望むのであればあなたがチームを率い、その代表者になることができます。



私がプロジェクトで行った活動について

私が 6 ヶ月間、活動を行ったプロジェクトは、チャイルド・エイドです。このプロジェクトで活動する DI (Development Instructor) は、地域コミュニティで生活をし、地元コミュニティの人々と密接に活動を行います。私はモザンビークの中心にある、ニヤマトンダと呼ばれる地域で活動しました。ニヤマトンダはソファラ行政区内にあり、ニヤマトンダの他にもブジィとゴロンゴサの地域でチャイルド・エイドは活動を行っています。



プロジェクトは 36 の幼稚園を、子どもたちが通いやすいコミュニティの中心地で運営しています。特に雨季になると、子どもたちは余計に学校に通いにくくなるので、このような配慮がなされています。また、プロジェクトは 48 の読み書きセンターも運営しています。このセンターでは、3つの異なるプログラムを同時に行っています。3つの異なるプログラムとは、RITA (Reducing the Impact and Transmission of HIV/AIDs。HIV/AIDS の影響と感染を減少させるプログラム)、AGSP (Ambassadors Girls Scholarship Program。少女代表奨学プログラム)、CB DOT (Community Base Direct Observation Treatment for Tuberculosis。コミュニティでの結核発症直後の基礎治療) のことです。

プロジェクトの活動は行政区の 3 つの地域に拡大し、Humana People to People と支援団体ワールド・ビジョン、Winrock International と USAID によって支えられています。プロジェクトの毎日の活動は、孤児の保護と世話から、少女の保護と世話にも力を入れ、基本的な生活必需品の配布、生活能力のトレーニング、衛生と栄養に関するキャンペーン、農業と収入創出活動、結核と HIV 感染者のケア、子どもたちが学校へ通えるための活動…など、実に様々な活動を行っています。



モザンビークを発つ前、私は自分のプロジェクト・リーダーと E メールでコミュニケーションをとりつづけることに同意しました。私はプロジェクトを管理するために、自分の位置が経営陣の中に留まり続けることに同意しました。私はプロジェクト・リーダー、2 人の副プロジェクト・リーダー、3 人の地区監督と密接になって働いていました。

私がもし、自分の 6 ヶ月間の活動内容をレポートとして書き始めたならば、それはとても多い枚数にわたるでしょう。それなので、私はここでは簡単に自分の活動内容について報告しようと思います。まず、私はフィールド・スタッフの活動を調査し、監督しました。そして、活動を延長するためにレポートや提案を書き、学習を向上する手助けをし、収入創出活動と食糧安全のトレーニングを通して彼らの生活状況を改善し、コミュニティの学校をよりよいものにするために建設作業も企画・運営しました。

幼稚園の建設は、私の大きな業説の1つです。コミュニティの人々と一緒により良い学校建設のアイデアがうかんだとき、私のあった主な知識や経験は、私がCICDの事前研修期間中に行ったビルディング・ウィークエンドを通じたものでした。私が助言を求められたり、どのように人々を動員すればよいのかというアイデアは、全てCICDのビルディング・ウィークエンドから得たものです。

私がプロジェクトを去る前にはこの作業はほとんど終了し、先月の10月31日でこの学校がコミュニティに手渡される嬉しいニュースを聞きました。

次のDIたちへのアドバイス

次のDIたちのためのアドバイスー私はここで、CICDから得た1つのアドバイスをみなさんに伝えたいと思います。これは、CICDでみなさんが必ず出会う指導教員（教頭）カリン・オブリガードが、ある有名な作家（アントニオ・コエリョ）の本から引用して私たちに教えてくれた言葉です。

『もしあなたが山を選び、あなたがそれを登ることを決めたのならば、それがあなたの登りとなるということ、それについて責任を負うということを忘れないで下さい。しかし同時に、山に登る人はあなたが最初の1人ではないことも忘れないで下さい。そう、なぜ、あなたの前に山を登った人に、どのようにしてその山を登ったのかについてアドバイスを尋ねることをしないのですか？これはたぶん、あなたに降りかかる多くのトラブルを防ぐかも知れないのに。そして、あなたが山のピークに達したとき、あなたは「私はたどり着くことができた」と言うでしょう。

これは、世界で望みを与え、協力を行い、何かを動かそうと思っているあなたの全ての人々が、何かを進行しているときの1度には、よく考えなければならないということです。

2007年9月チーム ジョン（カメルーン出身）

ジョンのアフリカでの活動記事が、下記のURLからご覧いただけます。

【<http://www.cicdvolunteer-japan.org.uk/Newsletter/July2008.pdf>】

イステイヴァンの日記ービリビザ村に到着するまでー

CICDのみんなへ

私が滞在しているビリビザ村でディーゼルがなくなったので、電気がない日々が続きました。電気がなくなった日は、だいたい30分経つともとに戻るときがあります。私は特にそれを気にしません。ろうそくの明かりで夕食をとることは、とてもロマンチックです。しかし、電気がなければ、私は自分のブログを更新することができません。そこで、私はその代わりに、紙に自分の日記を書くことにしました。おそらく、私の事後研修はこのような何かを書き留めることに費やすでしょう…。



とにかく、私は少しずつでもいいから何かを書き留めようと思います。今回、私はビリビザ村までの旅行について書き留めました。

ここビリビザ村では、私たちは水道水を飲みません。携帯電話を充電するものもありません。電気とインターネットもありません。最も近くにあるアスファルト道は、30km行ったところで見ることができます。食べ物はとても単純なものです。その他にも色々ありますが、私たちは大丈夫です。

私は英語と音楽を教え、日本人のともよとけいと一緒に情報科学も教えています。また、私は時々、Farmers Club（農民支援活動）で管理やコミュニティ訪問、セミナーの企画と運営、寄付者への報告などの活動も行っています。

けいはスポーツを教え、ともよは地元の幼稚園で活動しています。先日、彼らはEPFで「日本での生活」というとても成功したコースを行いました。学生は折り紙をととても楽しく学んでいました。

私たちはまた、自家製のピーナツバターを作ることができました。これは、マーケットで販売される半額の値段で済みます！現在、私たちはともよが活動している幼稚園のために、「鶏と卵」という収入創出活動を始める予定です。私は自分自身がエネルギーにあふれ、多くのことをしたいという気持ちでいっぱいです。私はとても幸せです。

9月18日（木）、私たちはモザンビーク北への旅行を続けました。私たちは午前3時30分にタクシーを利用してベイラのバスステーションへと向かいました。私たちのバスは、午前4時30分にキリマネに向けて出発すると思われました。それは小さく、面白いバスでした。そして、バスの中には、とてもたくさんの方が乗車していました。

運転手がバスに乗車したとき、エンジンを始動しようとした。しかし、何も起こりませんでした。運転手は何度も挑戦しましたが、何事も起きませんでした。私とけいは、お互いに直視しました。私たちはCICDで、運転手の経験があったので、これが何の問題なのかすぐにわかりました。それは、バッテリーです。

ついに運転手は、乗客の何人かの男性にバスを押しさせ、エンジンを始動することに成功しました。しかし、その次があります。そう、全ての乗客をバスに押し込むことです。

バスは日本のトヨタの中古車ワゴンで、バスの中には、左側に1つの席と右側に2つの席がありました。そして、4つめの席はその間に作ることができました。なんと、運転手は本来は4人しか座ることのできないスペースに、5人を乗せようとした。私の横に座っている女性は、それほど細い人ではありませんでした。私たちは、ぎゅうぎゅうづめの状態でバスの中に腰を下ろしていました。ある男性は大きなスーツケースを持っており、私の横に座っていた人は私を痛いほど窓のほうに押し付けました。

私の座っていた席は車輪の上にあったので、私のひざはとても不快な状況にありました。さらに、私は自分の荷物をもっていたので、その荷物が私のあごを押します。時々、私は頭をまわすことができたくらいで、私は全く身体を動かすことができませんでした。アフリカという暑い気候と道が悪い中、私



はこのような状態で14時間を過ごしました。これは、とても挑戦的なことです。それは旅行というより、拷問のようなものでした。



私はこの旅行中、痛みを忘れるために、眠りにつくか外界に集中しようと思いました。私は、真新しい鉄道線とたくさんの道再建を見ました。私たちは正午に、ザンベジ川（モザンビークで最も大きい川）に到着しました。川にかけられた長い橋は、現在工事中です。ちなみに、彼らはこの工事を3年前から始めました。この工事は、来年には準備ができているようです。（この橋の工事はEU Development Aidによって支えられています。）

そういうことで、現在はこの橋が準備されていません。そのため、私たちはフェリーを待たなければなりません。フェリーは12時～14時の間は休憩に入るので、私たちは昼食を購入することにしました。このとき、私たちはモザンビークの伝統料理 Shima（シマ。南部アフリカでよく見ることができる、とうもろこしの粉から作られた主食）を食べました。私たちは同時に、AIDS 防止とカウンセリングで働いているある女性を訪問しました。都市にいる支援者が彼女の仕事にたいして、いくらかの報酬を支払っていました。彼女が私たちの質問に答えてくれている間、私たちは冷たいシャワーを竹の事務所で楽しむことができました。



私たちは、18時30分にキリマネに到着しました。幸運にも、私たちは翌日の午前4時に、ナプラへ向かうためのバスのチケットを確保する手配をすることができました。マプトを出発する前に、私たちはビリビザ村へ向かうための道順を教してもらいました。それは、キリマネで私達がある宿舎で宿泊しなければならないということです。しかし、私たちが宿舎に向かったときは、すでに閉まっていました。周囲はすでに暗く、私たちは疲れていました。そこで、私たちは安いモーターを発見し、そこで宿泊することにしました。

9月19日（金）の朝、私たちはバスでナプラへと向かいました。このバスはとても快適なものでした。しかし、このバスは途中で壊れました。そこで、私たちはある村で待つことになりました。運転手は私たちを他のバスで送るため、彼の会社に連絡をとりました。しかし、私たちは他のバスが到着するのに4時間も待たなければなりません。

そこで私たちは、村のマーケットを見て回ることにしました。私たちは、ある人々が砂のような灰色のちりを売っているのを発見しました。それは、地元の人々が塩のかわりに使用するものでした。



バスが到着したとき、私たちはナブラへの旅行を続けることができました。私は、色々ありましたが、自分たちが南のマプトから北のビリビザ村まで、バス旅行をすることができてよかったと思っています。なぜならば、私たちはモザンビークの南の首都マプトから、北の小さな村々を見ることができたからです。この旅行が困難なものでも、それでも素晴らしくて忘れられない経験となりました。



旅行中、そしてバスが止まっていたときに、私たちは周囲を見渡すことができ、現地を知って人々と話すことができました。南から北へと向かう中、自分たちが見るものが変わっていくことにも気づきます。景色、家、人々や彼らが身につけている服…それは北へ向かうほど、貧しいものでした。私の最初のアフリカについてのインスピレーションは、私が現在、アフリカに居るのだということです。

バスの休憩中、私は子どもから手作りのケーキとバナナを購入しました。バナナは、ヨーロッパよりもとても甘かったです。通常、緑のバナナが木から切り落とされて輸出のために持っていかれ、ヨーロッパに輸送される船の中で黄色になります。しかし、アフリカで売られているバナナは、黄色くなるまで木から切り落とされないため、とても甘くなります。

マプトでは、私は自分が貧困国にいることだけを感じていました。しかし、現在、私はもう 1 つの世界に居ることを感じました。それは、「アフリカ」と呼ばれている国です。

私たちがナプトに到着したとき、私たちは宿舎に行って夕食をとりました。私たちはカップ 1 杯ほどの小さなアイスクリームという、少しの贅沢をしました。翌日、私たちはミニバスでナカラに向かい、ビリビザに向けて出発しました。

2008年3月チーム イスティヴァン (ハンガリー出身)

College for International Co-operation and Development
(CICD)

@ Winestead Hall, Patrington
Hull, HU12 0NP
England

Email: cicd05@yahoo.co.jp

Contact Details:

Tel: +44 (0)7813 854 298

+44 (0)1964 631 826

Fax: +44 (0)1964 631 695

Websites:

Website: www.cicdvolunteer-japan.org.uk

Blog: <http://volunteermemories.blog94.fc2.com/>